

城君の思い出

« Mais là-haut dans le ciel
La lune veille sur eux. »
Jacques Prévert

吉田城君とは日比谷高校の英語クラブで共に英会話習得に取り組んだ仲だ。と言っても、彼はAFSで米国留学をめざす実力者で、私にとって常に仰ぎ見る大きな存在だった。この頃の一番の思い出は、学校行事の文化祭に向け英語劇の準備に共に汗を流したこと。男が公園のベンチに座っている。時間を気にしながら横をふと見ると、自分と同じく襟に赤いカーネーションを挿した輩がいる。二人の間で次第に探り合いの会話が始まる。実は、二人は同じ女性と待ち合わせていたのだ。この男性役を彼と共演した。台本ではタバコを吸う場面があった。練習中は火をつけて吸う真似をしたが（不味かった）、上演当日になって学校側のチェックが入る。未成年者がとんでもないというわけだ。スッタモンダの末、折衷案として火のついていないタバコを咥えることで何とか落着いたが。この時の台詞の一つ「(It) serves you right !」は、演技指導の英国人に嫌になるほど発音とイントネーションを直されたせいも、今でもしばしば耳朶を掠める。そしてこの尻上がりの音とともに、あの時舞台上で颯爽と演じていた城君の映像が、一コマコマ蘇ってくるのだ。（訳はあえて付けません。やや上品とはいえ罵り言葉ですのでお手元でお調べ下さい）

さて、それから10年近く経って、城君とはパリで再会することになる。私は1977年9月にブザンソン、カンヌ、ロワイヤンでの半年ほどの語学研修を終え、さらにパリ大学付属東洋語学校に通うためパリに出た。企業派遣留学生としての1年目のことである。ある日、実家の母から城君が同じようにパリに留学中と聞く。早速電話をすると、「Allo, Allo? (ハロー)」、返ってきたのは紛れもなくあの清しい城君の声だ。異国で同胞に出会うと格別な思いがするものだが、ましてあの城君である。高校時代から畏敬して止まない語学の師のような存在の彼である。私は彼がその父君のような英文学の教授を目指しているものとばかり思い込んでいたから、今彼が仏文の世界にいることには少々意外な感じを受けた。が、母国を遠く離れた留学生同士。その場で、彼の住まいを訪ねる約束をした。

彼のアパルトマンを訪ねると、長髪にジーンズ姿の高校時代と変わらぬスリ

ムな城君が、破顔一笑、「やあやあ、久しぶりですね」と迎えてくれた。皆さんご存知の独特のスマイルと風格。再会を祝して入った近くのベトナム料理屋で、卒業以来のお互いのことを時間も忘れて語り合った。城君はフランス政府給費留学生としてバリ到着間もなかったと記憶している。短期間に一定の成果を上げようという強い意欲と同時に、彼の背負っているプレッシャーがひしひしと伝わってきた。一方私はと言えば、夏の間中、南仏やら西海岸のリゾート中心に語学研修を組んだりしてバカンス気分浸っていたのである。彼の熱い思いに耳を傾けながら、私は体全体を揺さぶられるような衝撃を禁じ得なかった。この数時間の再会で、私は、学究の徒として真摯に留学を捉える彼から、計り知れないほどの刺激ももらったのだ。留学2年目、私がビジネススクールでフランス人に混じって必死に勉強できた原動力は、この時に生まれたと思う。結局その後の勤務を合わせると私のフランス語圏での生活は通算10年近くとなったが、あの時の城君との出会いこそが、以後のわが人生の方向を決定付けたのだと私は信じている。

今思えば、英語では私は常に彼の後塵を拝していたので、無意識のうちにフランス語にのめり込んでいったような気がする。しかし、すでに彼はフランス語でも遙か遠くを走っていたのである。爽やかな敗北感を感じたのが昨日のことのように思い出される。

さて、現在私はフランス語とは全く縁のない世界にいるため、わが語学力の低下は否みようもないが、いずれ錆び落としをするつもりである。いつか時間がたっぷりできたらと思ってフランス、ベルギーで買い込んだフランス語の原書がかなりある。その中に城君の専門だったブルーストもいずれ加えよう。多分、読むのは大変だろうし、「あんまり無理すんなよ」と天国の彼に笑われそうだけれど、構わない。いつも彼の後ろをマイペースで行くのが自分の流儀である。城君同様、華麗な言語—フランス語に魅せられた元クラスメイトとして許してもらおう。

私をフランス語に強く引き寄せてくれた城君、心からMerci。そして、Vive la langue française! (フランス語、万歳!)

2006年 3月20日

尾木原純一 Junichi OGIHARA